

---

# 紅と蒼 - レイ -

カズト

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅と蒼 - レイ -

### 【Nコード】

N7349A

### 【作者名】

カズト

### 【あらすじ】

1、始まり、貴方を忘れぬように、ドスケベ。単純、直情バカと三拍子揃った茶髪の少年、レイ。でも、彼は真紅眼レッドアイズを持つ怪物だったのだ。

## 第一話 蒼き剣士と東京タワー

風がそよそよと吹く穏やかな夜更け。彼女の眼前には色とりどりの鮮烈なイルミネーションが広がっていた。

辺りは深々とした深い闇が包み込み虫の音もない。普段では絶対にありえない静寂。輝きながらそびえ立つ東京の名所を前にして、少女とその存在は向かい合っていた。

「しぶといな」

静まり返った空間に凜とした高い声が響き渡る。片方の影の主だった。冷たい言葉は対峙する影に向けられている。その影の全長は成人男性のゆうに三倍はあるだろうか？ 東京タワーのイルミネーションに照らされたその姿は、

下半身が大蛇のように変化した人間、いや人間の皮をかぶった怪物だった。

体色は薄茶色で大きさはゆうに五メートル近く。もちろんそんな大蛇も、ましてや人間も、この世には存在しない。その血生臭いほどの緋色な眼は見るものを圧倒し威圧する。

しかし、その異形の胴体にはすでに無数の切り傷のようなモノがあり、紅い瞳を憎々しげに歪めながら対峙する人間を睨んでいる。その相手は美しい少女だった。

漆黒の艶のある流れるような黒髪。無駄なく鍛えられたスレンダーな肢体。スツとした鋭利な美貌を持ち、切れ長の深海を思わせるような青い瞳は目の前の敵を見据えている。その腰には何故か数本の小さなペットボトルが差さっていた。

「はあっ……！」

気合一閃。全身をバネにして彼女は異形との距離を一気に縮めて

いく。異形も東京タワーから彼女に向かって飛びかかった。

お互いの距離が肉迫するまでに接近する。女の木刀には闇夜に映える月光の光を纏っていた。

『死ね、オンナア！』

怪物の口元がこれから起こる血の宴を思い醜悪に歪む。彼女は返事を返さないが異形の言葉に不快の念を抱いたことだけは間違いない、木刀から女の感情を表すように静かな青い光が煌めいた。

互いの影がライトアップされた東京タワーに照らされながらゆっくりと交錯する。

それはまさしく必殺の一撃……

両断された大蛇の異形は地に落とされて呻いた。

競り勝った彼女。静かに、夜の静寂さを破らないように優しく大地に舞い降りた。

辺りには一刀両断された異形の一部がいくつも降り注いでいく。綺麗に尾と胴体を切り離された大蛇の異形、おびただしい鮮血が周囲を汚している。致命傷を負ったのはほぼ間違いなかった。

女はゆっくりと異形に近づいた。微塵も恐れを抱かずに、むしろ恐れを抱いたのは異形の方だった。苦し紛れに口から溶解毒を放つ異形。彼女はそんな不意打ちにも冷静に毒を見切り木刀で薙ぎ払った。

もはや異形に勝ち目はなかった。それでもわずかながらの生に執着し毒を放ち続ける。その姿はただ哀れだ。

女はその全てを冷静に冷淡に、避ける。木刀で薙ぎ払う。木刀に付いた毒は青い光に触れると塵になって消滅した。異形にはそれが自分の未来に思えて仕方がない。だから、

『た、頼む。殺さないでくれ。俺は被害者なんだ。それに、お、俺

には娘が、家族がいるんだ。だから……」

だから女に命乞いした。だが、女の表情はそれを見てもますます冷めていく。まるでつまらない道化を見るかのように。

とうとう目前まで迫った少女。異形は血塗られた眼に、似合わない懇願や恐怖を浮かべるが、女はそれでも止まることなく木刀を振りかぶる。

「忘れたのか。おまえの家族は、おまえが殺したんだろう」

そこで彼女は言葉を切る。その蒼い瞳に深い憎しみを湛えて。あとはただ木刀を振り下ろすだけだった。

振り落とされた木刀は一思いに大蛇の異形を葬り去る。体からは噴水のような鮮血が噴き出し、目を閉じた少女の顔を真紅に汚す。それでも少女の美しさは微塵も揺らがない。むしろ洗練された一枚の宗教画のような神聖さすら見出せた。

女はやがて閉じていた目を開く。その目には役割を終えたように青色の輝きは消え失せ、代わりに理知的な黒い瞳が居座っている。しかし、その強烈な眼光はひとつも変わってなどいない。

それは誰にも犯されることのない穢れなき真っ直ぐな瞳だった。

## 第二話 少年と紅い瞳

ヴァリアント  
異形

人間が怪物化したもの。突如、世界中に出現した紅眼の怪物。  
ウォリアー  
戦士

人間が特異な力を得たもの。ヴァリアントと同時期に出現した。

世界の一部に彼らは生まれ堕ちた。

街の中心部、銀色の高層ビル群の中でもひととき異彩を放つ巨大な高層ビル。

特殊災害対策機構・ZERO日本本部。

表向きは様々な方法で高度に偽装された建物で、本部のセキュリティは万全、物理的、電子的にも最高な物を備えている。内部も高性能カメラで常に監視され、警備システムも死角がない。

そんな物騒な警備の中、おおよそ不釣り合いであろう少女が、これも不釣り合いな重厚な扉の前でたたずんでいた。

彼女の名前は木下怜。まだ十七になったばかりの少女、が、侮つてはいけない。ひとたび廊下を歩けばある職員は羨望の眼差しを送り、ある職員は嫉妬の眼差しで見ると。それらに共通するのは好奇の視線。それらの視線を涼しい顔で流しながら怜は目の前の重々しい鋼鉄の扉をノックする。

「入ってくれ」

それが合図のように扉の電子ロックが解除された。

「失礼します」

見た目どおりの重々しい扉を彼女は苦もなく開ける。部屋の中は浮世離れといえるほど装飾華美で部屋の主のセンスを疑うが、中央

に座した机には缶ビールの空き缶やタバコの吸い殻などの生活観で満ち溢れていた。そんな机に居座る女。濡れた赤い唇。エッジの利いた鋭角的なシルエットのスーツ。まさに大人の女然とした雰囲気。を漂わせていた。

「ようお疲れさん、夜の東京タワーは楽しめたか？」

「おかげさまで。大切な休日の午後を存分に楽しめました。これがその報告書です、所長」

彼女、諒子の嫌味に涼しい顔で嫌味を返す。そんな相変わらずな怜を見て取り諒子はくくくと可笑しそうに笑う。

「まあ、そんなに怒るなよ。こっちは曲がりなりにもお給料渡してんだからさ。……国民の血税で。というわけだ。国民のためにもう一仕事頼む」

「すみません。何がどういうわけなんですか？」

「数分前に本部がヴァリアントの反応を捉えた。ここから場所も近い。ひとつもふたつも似たようなもんだ。ついでに頼まれてくれ」

「………はあ、わかりました。これが済んだらもう少し考えてわたしのシフト調整をお願いします」

「ん、考えとく」

「深夜十二時まで後三十八秒！」

無骨な階段を四段飛ばしで駆け上がりながら俺は無意識に叫んだ。腕時計を見ると無常にも秒針は時を刻み続けている。俺は余計に屋上まで急いだ。

「ま、間に合った」

幸い、鍵のかかってなかった屋上の扉を開き、俺はだだっ広い屋上にたどり着いた。外に出た途端、高層ビル特有の強く肌寒い疾風が俺の茶髪を揺らす。特別、付近に変わったところは感じない。

「……なにマジになってんだよ、俺」

汗だくになりながら俺は呟く。冷静な思考になっていくにつれ、俺はここまで全速力で走ってきたことが急にアホらしくなった。

「また殺戮を繰り返す」か。はん、アホくさッ」

俺はきびすを返す。あの手紙がイタズラだと分かった以上、長居は無用だ。無用なんだが、

微かに感じる何者かの気配が、俺の五感に激しく危険を訴えかけていた。

自分の感覚を信じ、後ろに振り返る。その視線の先には俺がいる屋上と五階ほど高低差のある向かい側の高層ビルがあった。

俺はフェンスから身を乗り出し、その高層ビルから放たれた気配を探る。複数の照明でライトアップされた屋上は夜でも明るい。その屋上に俺を見つめる誰かがいた。

「ぐっ!？」

不意に向かい側のビルからピアノ線に近い何かが飛んできた。それは瞬く間に俺の首へと絡まり、強烈に締め付けてくる。俺は危険を感じてとつさに自分の爪で首を掻き切った。

何かを切った感触と、流れ出る暖かい液体。月明かりに照らされたのは俺の真っ赤な血だ。

「蜘蛛の、糸？」

血染めの指に絡み付いていたのは蜘蛛の糸に似たそれだった。これで首を絞められたのか。俺は傷ついた首を押さえつつ、向かい側のビルにいる影を睨んだ。俺の黒い瞳が、戦おうとする意思に呼応して瞬間的に血のような真紅に彩られたのが分かる。こっから俺の逆襲だ。

そのままコンクリートの大地から助走をつけて一気に跳躍。何秒間かの浮遊感を味わった後、俺はビルの屋上に何とかバランスをとって着地した。

『ふふん、やるなあ』

俺の行動に口笛を吹いて応える誰か。俺はそいつを真紅の瞳で睨



みつけた。

顔に生えた不気味な足や、胸を飾る蜘蛛の巣のような装飾品。腕からは鋭い鉤爪が生えている。そして、瞳は血のような真紅。影の正体は毒々しい紫色が特徴の不気味な異形だった。

「おまえ、俺になんの恨みがある？」

そう問いかけながら腰のホルスターから愛用の黒い二丁拳銃『シユヴァルツ』を握った。

『強いていえば、単なる暇つぶし。かな？』

「そうか」

俺は奴の顔へ銃口を向け、銀のトリガーを引いた。

「反応は、ふたつ？」

時刻は深夜十二時を少し回った頃。

激しく反応する手元の機械を見つめて、怜はつぶやいた。

その液晶にはActiveという単語と、二つの赤い点が画面の地図上に表示されている。怜は手元の機械から真下の屋上に視線を向けた。

とみながコーポレーション公社ビル。会社や周辺の人々の非難はすでに完了している。彼女を乗せたヘリは備え付けのライトで屋上を瞬時に照らした。

「怜、屋上の様子はどうだ！」

バリバリと轟音を立てるローター。そんな中、ヘリに備えられたヘッドフォン越しに諒子からの通信が入った。怜は騒音に負けない声で諒子に応答を返す。

「屋上にヴァリアントと思われる影をふたつ視認！」

「よし！ 片方は真下を固める連中に任せろ、気張ってやれ！」

それを最後に互いの通信は切れる。怜はヘッドフォンを元の位置に戻すと躊躇いなくヘリの扉を開放した、鋭い疾風が身を刻む、操

縦士がへりを屋上に接近させると怜は一気に飛び出した。

落下しながら得物の木刀を抜く。瞳が海よりも深い青に染まり、人間離れた身体能力が怜を目的地に導いていく。身を切るような突風をもともせず、怜は苦もなく公社ビルの屋上に地面を砕いて着地した。

淡い黄金の月光を背に受けて立ち上がった怜、その青き眼は漆黒に塗りつぶされた世界でさえ鮮明に映えた。

「い、痛え！！」

夜の静寂を貫いて何者かが素っ頓狂な声を上げた。怜が砕いたコンクリートに運悪く当たったらしい。見ると声の正体は茶髪の十七か八くらいな茶髪の少年だった。

年の功は怜と同じか、一、二歳の誤差があるくらい。しかも両腕には漆黒の大型二丁拳銃を握っている。どう見ても一般人ではなかった。

加えて両目を彩るのは血のような真紅の眼差し。それは紛うことなき異形の証だった。

### 第三話 黒の銃使い

永遠に復讐の連鎖は終わらない。その絶望が俺に贖罪を決意させた。

戦うことでしか自分の存在を証明できない。自暴自棄なココロが私を変えた。

この何も生み出さない茶番を終わらせたい。そんな願いがキセキを呼んだ。

蜘蛛野郎とビルの上で戦っていた時、それは現れた。

ローターの出す激しい爆音。闇を切り裂き屋上を照らし出すライト。見上げると闇夜に浮かぶ無骨な鉄の塊。それは漆黒に塗り潰されたヘリコプターだった。

「嘘だろ」

機体のドアが開く。驚いたことにそこから黒い影が颯爽と飛び出したんだ。

「い、痛い――！」

何かの破片が俺の顔面に直撃した。暗くて破片の正体はつかめないが原因は分かる。痛さでちよつと涙目になりつつ、俺はこうなった原因を睨んだ。

圧倒された。

冴えた月光に照らされた、流れるような黒髪と透き通るような霽靄。淡い青の輝きを放つ瞳。右手には得物なのか一振りの木刀。大人びた容姿だけど、たぶん女子高生ぐらいの女だった。

俺は動揺した。抜群に目を惹く容姿もそうだが、一番の理由は相手が纏う殺気が尋常じゃないからだ。いや殺気って表現は妥当じゃない。そう、『剣気』って言葉が似合うような。それが強烈な悪寒

と魅力を伴って俺を惑わせる。グリップを握る手が汗ばんでるのが分かった。

『これはこれは。とことんツイてないな。俺たち』

蜘蛛野郎の声で俺は現実に戻ってきた。

「おまえ知ってんのかよ。あの女」

この気配はどう樂觀的にとらえても単なる一般人が持つてていいものじゃない。

『俺たちの世界じゃかなり有名な狩人だな。ああ、かなりの美人としても名を馳せてる』

「つまりはそっちの筋のお方が」

俺たちの反応を捉えた奴らの刺客つてところか。そういえばあいつのジャンパーに『ZERO』の刺繍が入ってる。青い瞳も奴らの特徴のひとつだ。

『さて、俺も命が惜しい。互いのために先にずらからせてもらっていいか？』

「勝手にしとけ。俺もおまえとあいつを同時に相手できない」

『じゃあ、お言葉に甘えさせてもらう』

「下にもあいつの仲間が居る。せいぜい気をつける」

『ご忠告どうも』

頑丈な蜘蛛の糸を駆使して、蜘蛛の化け物は屋上からさっさと逃げていった。

「追わなくていいのか」

「……」

「無視かよ」

俺は黒の二丁拳銃『シユヴァルツ』を水平に構えた。女は予想に反して銃口を向けられても平然とした様子。むしろ挑発的に木刀をちよいちよいと振ってきた。

その余裕な態度に俺はカチンと来る。

漆黒の銃身を相手に向けて俺は銀色のトリガーを引き絞った。放たれたのは真紅のエネルギー弾。これだけの近距離だ。避けようがない。そんな余裕はものの二秒で崩れ落ちた。

俺の力を籠めた弾丸。それが凄く速さで振り抜かれた木刀に弾かれた。俺は啞然、とするしかない。一瞬の攻防で見せた技。神速に近い抜刀術だった。

見るといつの間にか相手の木刀に蒼い光が纏っている。性質は俺の力に似た感じ。それを踏まえると、おそらく物質に『切れ味』を付加するようなものだろうが。

「今度はこっちの番だ」

初めて女が言葉を発した。その姿が残像を残して忽然と消える。

「嘘、だろ」

「どうかな」

真後ろから首筋に吐息がかかった。思ったより声が近い。意識を後ろへ向ける直前、俺は地面に倒れた。倒れながら見たのは仏頂面で俺を見下すあいつ。

どうも背中を斬られたらしい。さらに追い討ちで二回目の斬撃。派手に血飛沫が飛び散る。俺はたまらず冷たい地面に大の字で倒れ付した。

淡い月光を背にして女は俺の腕を踏みつける。ひとつの反撃も許さない気迫だ。

その瞳に宿るのは深海よりも深いブルーの輝き。不思議とこの女にマッチしていた。

これで勝負は決した。俺の首を刎ねようと無常にも振り落ろされる木刀。それは微塵の容赦も感じさせない一撃。

ほとんど野生の勘だった。

弾かれたように俺は真横へ跳ぶ。一秒後に木刀がコンクリートの地面を抉っていた。あと少しで首を跳ねられた僅差の時間差<sup>タイムラグ</sup>。俺は奴から十分な間合いを取ると自分の首が繋がつてることを必死に確認した。

「本気で死んだと思っちまったじゃねえか!!」

全身にひんやりとした感触が走る。この激しい動悸は身近に迫った死への恐怖か。圧倒的な現実味を持って俺に襲いかかった。でも、それが逆に俺の頭を冷やした。

スタミナ不足の俺に長期戦は無理。短期決戦で攻める。勝負はこれからだ。

二丁の愛銃を同時に撃ち込んだ。それが着弾する前にさらに『シユヴァルツ』を連射する。攻撃は最大の防御。容易に攻め入れないよう強烈な弾幕を張った。

普通なら腕が千切れそうな反動<sup>リコイル</sup>。でも普通じゃない俺はかまわず連射を続ける。だが、相手も網の目を潜るようにあの弾幕を抜けてきた。オイオイ。

「にやろうッ!」

絶えずトリガーを引き絞ったがそれは簡単に弾かれ、逆に間合いを詰めることを許してしまう。奴の速さの前では反撃も間に合わず、

「くそ」

ついには右手の甲に一撃を許した。傷は浅いみたいだが、追い詰められた事実に変わりはない。戦況はかなり悪かった。

「くそッ!!」

俺は鈍い光沢を放つ銀色のトリガーに手をかけた。当たり前のように

うに策は考えてない。結局は当たって砕けるか。

俺は覚悟を決めて銃のトリガーを絞った。静寂な夜の世界に乾いた銃声が轟く。放たれた紅の銃弾は真っ直ぐな軌道を描き女に吸い込まれる。前に木刀の剣芯で弾丸が弾かれた。

間髪いれず左手の愛銃を撃つ。軽快な身のこなしで女は弾丸の雨を避けていくが俺は気にせず弾幕を張った。

相手は弾幕に少なからず後退する。そもそも根本的には”銃対剣”の戦い。それを五分五分以上に持ち込まれたのは敵の実力が純粹に高かったからだ。

左手で順調に弾幕を張り、右手に持った銃へ意識を集中させる。こんなに撃つと普通は弾切れしそうだけど、これが俺の力。あいつが物質に『切れ味を付加』できるように、俺も『弾丸を生む力』がある。ネックはあるんだが。

左の銃を撃ち止めた。そろそろ連射も限界だ。俺は左手の銃を腰のホルスターに戻すと右手の一丁に全エネルギーを注ぎ込んだ。銃身から紅い稲妻がバチバチと音を立てて進む。女も木刀にエネルギーを補填させ、刀身を纏う蒼い輝きが一段と増した。

俺にとってもアイツにとっても最後の一撃だ。

奴の頭に銃口の狙いをつけ、アイツは中段に木刀を構えた。しばらく相手も下手に動かないはず。そう踏んだ。

一分、二分、三分、

仕掛けるタイミングを見極めんと互いに隙を探り合う。五分を越す頃になると緊張を通り越して焦りが出てきた。要するに痺れが切れてきたってことだ。

はったりでトリガーにかけた指に力を籠めた。アイツは眉ひとつ動かさない。これはヤバイ。小さな隙でも一瞬で間合いを詰められそうだ。

さらに五分、

俺はとうとう撃たざるを得ない状況に追い込まれた。つてのも一撃必殺にしようと凝縮したエネルギー弾だが維持に多大な集中力を使う。十分も集中できただけ俺にしては奇跡っぽい。

汗が滲む指でそつと銀のトリガーを引いた。

それで呆気なく均衡状態が崩れる。いままで人形みたいに固まっていたアイツは弾かれたように真上へ跳んだ。全力を籠めた一撃は容易くさけられる。俺は真正面から受け止めると思ったからこの行動はまさに虚を突かれた。それでも瞬時に動けたのは奇跡に近い。

あいつは俺の頭上っていう死角から現れた。この位置じゃ迎撃は無理かもしれないが、やるしかない。

右手のトリガーを引き絞って撃つまで約二秒。木刀はすでに俺の脳天をかち割ろうとしている。それでも反撃のチャンスは十分。

俺は自分の命運をかけて二回トリガーを引く。二発の弾丸が俺にはなぜかスローモーションに見えた。

当たったときがまさに勝負！

まず狙い通りに初弾が木刀の剣腹へ、俺の脳天をかち割ろうとしていた木刀の軌道が反れる。女は反射的に剣筋の軌道修正に入ろうとするが、さすがに空中じゃ無理だ。体勢が崩れる。そこに本命の二発目が女の腹部へ。弾丸が女の脇腹をキレイに貫通した。体制を崩して女が地面に落ちる。そして、とうとう俺の真横に崩れ落ちた。

凍結した時間の中、再びゆっくりと時が流れ出す。

俺は勝利の余韻に浸る余裕は無かった。身体中が妙な倦怠感に襲われてるし、今更のように斬られた箇所も痛む。何よりこの女はあの体勢で急所に向けられた弾丸を避けていた。だから狙ってもいい脇腹を貫いた。

しかも、

「……………化け物染みてるな……………おまえ……………」



見下ろすと心臓に近い位置から下腹部が斬られていた。直後、強烈な痛みに襲われた。血も流れていた。

俺の一撃を受けて落とされたあの瞬間、あくまで冷静にかまされていたカウンター。おまけに心臓を狙うサービス付き。いろんな意味で背筋が凍りついた。誘い込まれたのは、ひょっとして俺の方だった？

「おまえ、悪魔だろ」

俺は無防備に倒れ込んだ。足が盛大に笑ってる。どうやら力の使い過ぎで貧血気味らしい。このままだと、いくらなんでもあの世に逝く。

「今日のところは逃げさせて貰うぜ。ZEROのウォリアーさん」  
俺は気力で立ち上がるとそそくさと逃げに入る。こんな若い身空で死にたくない。でも、現実はそのなに甘くなかった。

「おい」

ピキッとフリーズ。

「このまま逃げる気」

「やっぱり見逃しちゃうもらえないツスカ？」

「これ以上やると互いに不利なのは明白だから。残念ながら」

「それもそうだな」

俺も相手も膨大な力を消費した。これ以上は生命に関わる危険なラインだ。お互いもう戦えない。

「じゃあ、なんだ」

「なぜ……した」

「あん？」

「なぜ、急所を外した」

「つか、おまえが外したんだろ」

「そういう意味じゃない。おまえは寸で急所から銃口を逸らしていた。無意識かどうか知らないが」

あの一瞬の攻防の中でそれを見切るなよ。恐ろしい観察眼だ。俺はため息を吐き、

「だって人殺しはよくないぜ」

「ヴァリアントの癖に。よくも飄々と」

「そう言われてもなあ」

俺はさっきの戦いで壊れたフェンスに寄りかかる。夜空には気持ち悪いぐらい満天の星が煌めいていた。嫌味なぐらい綺麗な夜だ。

「自己紹介がまだだったな。俺の名は大神レイ。よろしく、そんでさよなら」

いまできる精一杯の茶目っ気を出して俺は壊れたフェンスに脚をかける。昔から逃げるが勝ちって言うからな。

「おまえは本当にヴァリアントなのか」

俺はそれを鼻で笑った。

「愚問だぞ。どこの世界にウォリアーと戦える人間がいるんだって。あいつはどんな表情をしているのか。背を向けた俺には分からない。」

「あんたも、さっきみたいな捨て身の攻撃はほどにしとけよ」  
俺はそう捨て台詞を残すとビル二十階の高さから地面に向かって落ちていった。

#### 第四話 苦悩と衝動と

「今回の報告書です」

「ああ、連チャンご苦労さま」

「どうも」

ZERO本部所長室。怜が諒子にだまって報告書を提出した。

服の下には医務室で包帯を巻き止血をもらっていた。そのサマを見て諒子は苦笑した。

「まあ、気にするなよ。今回は二体とも逃がしてしまったが、おまえのおかげで一定以上のデータが取れたからな」

怜と戦った少年はビルから跳んでZEROの包囲網から逃走。もう一体のヴァリアントにも逃げられた。あまり褒められた内容ではなかったが、諒子はきちんと仕事を果たした怜に労いの言葉をかける。

「ただな」

「なにか？」

「今回の件で私なりの疑問がある」

「疑問、ですか」

「ああ。まずひとつ目は現場のいたる所に見つかった弾痕。ま、なぜか弾丸自体が見つからなかったそうだが。まあ、弾痕なんて明らかにおまえじゃないよな」

諒子は怜の目を見つめたままだ。その眼光はさすがに所長の貫禄がある。嘘は許さない、言葉より両目が雄弁に語っていた。

「しかし、おまえはヴァリアントと戦ったとだけ報告した。そして、現場には『弾丸のない弾丸』状況は明らかに普通のヴァリアントでないことを示している。なのに報告は普通のヴァリアントと戦ったと。おまえが仕留め損ねたどころか、傷まで負わされた相手が普通か？」

「……」

「おほん。ま、それはひとまず置いてこう」

咳払いで仕切りなおす諒子、張り詰めた空気が元に戻る。怜も緊張を解いた。

「ふたつ目の疑問だ」

諒子は報告書を閉じて机に片肘をつける。

「この報告書を見ると、おまえが戦ったヴァリアントは変化したとある。でも変化したヴァリアントの特徴は書いてない。仮にもし変化せずにおまえと渡り合ったとすれば、戦った相手はかなり強力な……」

「勘ぐり過ぎです」

そこではじめて怜が口を開く。

「今回の状況はすべて報告書に。それ以上は私の知るところではありません」

失礼します。一礼すると怜は重々しい扉を開いて所長室から出て行った。

ゴトンと音を立てて分厚い扉が閉まる。部屋には諒子一人が残された。

「やれやれ」

諒子は重たい感情を溜息にして吐くと他の仕事をテキパキと片付ける。

癖のある部下を持つと苦勞するもんさ、上司ってもんは。

諒子は幼い日の父の言葉を思い出した。いまならその気持ちがいほど理解できる。暇つぶしに机に置いた地球儀をクルクルと回してみた。

「ああ、やめたやめた」

しばらくして、回すのに飽きると自分の仕事を片付け始めると書類は山のようにうず高く積まれていた。

つねに清潔に保たれた廊下。純白に近い真っ白な壁に怜は寄りかかった。所長の前では痩せ我慢していたものの、さっきから腹部から背中にかけて鈍い痛みが走っている。弾丸は貫通したが受けたダメージは決して少なくなかったのだ。

これぐらい大丈夫。これぐらい耐えられる。そう強く念じれば念じるほどにあの言葉がよみがえる。

あんたも、さっきみたいな捨て身の攻撃はほどにしとけよ。

それはレイにとってはただの純粋な忠告のつもりだった。怜にもそう見えていた。無意識に悪人でないとすら思っている。そう、彼女は人の本質を見抜く力に優れている。でも、いまはそのカンを信じていいものか。怜は迷っていた。

「……くそ」

怜は分厚い構造の真っ白な壁に右の拳を打ちつける。悪人じゃないと考えた自分の思考を否定する。何度か壁を殴り、拳が血で赤く染まっていく。それでも言い知れぬモヤモヤは晴れない。

負けた悔しさも確かにある。だが、それより許せないのはわざと報告義務を怠った自分だ。それは自らの手で痛み分けしたあいつを倒したいという気持ちなのか。それとも、

夜の繁華街。そんな活気に満ち溢れた中心街からほんのひとつ道をそれるとゴミゴミした路地裏に入る。俺はそんな場所に居た。

「ああ、くそ！」

俺は真っ黒に煤けた小料理屋の壁に寄りかかりズルズルとしゃがみ込む。倒れた拍子に青いポリバケツがひっくり返った。

「……たく」

俺は仕方なくゴミに寝そべりあぐらをかいた。今夜の寝床はここだ。この街には帰る家も寝る家もない。とはいえやはり夜の街は肌

寒かった。腹の傷に染みそうだった。

俺は着ていたシャツを捲る。見ると下手くそに巻いた包帯から血が滲んでいた。仕方なしに薬局で買った包帯で適当な止血をしておいたが、あとはヴァリアントの回復力を信じるだけだな。

「ふう」

天を仰ぐと漆黒の闇に金色の月が覗いていた。どんなに汚い環境でも夜空はみんな平等に見えるらしい。たまには感傷に浸るのも良さそうだった。

ジーンズのポケットからクシャクシャになった紙を取り出す。広げると機械的な文字で淡々と書かれた手紙。内容は簡潔だ。

「一週間後の深夜十二時。とみながコーポレーション公社ビルからまた殺戮を繰り返す」か」

いま見てもふざけた内容だ。俺だって最初は何かのイタズラだと思っただ。末尾に刻まれたあて先を見るまでは。

Y・H・へ

そして、半信半疑で行ってみるとホントにあの蜘蛛野郎が現れた。「ったく。誰が書いたんだか」

「なんなら教えてやろうか。俺が」

「は？」

真上からいきなり誰かの声が響いた。慌てて空を見上げると四方を探る。その誰かの気配を探して。

「おい、どこ見てんだ」

不敵に言い放ち真っ白な糸を垂らして現れる、右と左の体がシンメトリーじゃない、毒々しい紫色の不気味な異形。しかも俺はそいつを知っていた。

「噂をすればなんとやらか。こういう状況って」

その姿はあするとき。あのビルから取り逃がしたあの蜘蛛野郎だった。

## 第五話 悪魔の巢

夜の帳が下りてきた真夜中の繁華街。

『ずいぶんと驚いた様子だな』

街の中心部からすこし外れた路地裏で俺と蜘蛛の化け物は対峙する。

『おいおい、俺が来たのがそんなに予想外だったか。まあ、そうだろうな』

「ああ、思わぬ伏兵だった」

俺は黒革のホルスターから二丁の愛銃『シュヴァルツ』を抜いた。それで奴の掌から放たれた鉤爪つきのワイヤーをがちり受け止める。

「そんな不意打ち通じるか」

ワイヤーを両手で握り締めると思いつきり後ろに引つ張った。紫色の毒々しい体がふわりと宙を舞う。空中で体勢を崩した蜘蛛野郎に俺は二丁の銃口を向けた。

『グツ！？』

あいつの胸から赤い火花が散る。そのまま悲鳴を上げる間もなく向かいの壁に激突した。当たった衝撃に壁の一部は粉々だ。

「いくら怪我人でもな。おまえごときに遅れは取らねえよ」

「そりゃ悪かったなあ。謝ってもいいぜ」

崩れた瓦礫から奴が起き上がった。だが、そこで攻撃の手を緩める俺じゃない。シュヴァルツの連射で果敢に攻め立てる。悪いがここは狭い路地裏。武器が武器だけに俺に有利な地形だ。

「おまえはここで滅ぼす」

『ふん、調子に乗るな』

「戦い続けたら。どっちが調子に乗ってたかハッキリすると思うけどな」

『いや、俺は勝てない勝負はしない主義だ。またずらかせてもら

う

そう言つて口から粘着質の糸を吐き出すと、前回と同じく路地裏から夜の闇へ蜘蛛野郎は消えていった。

「物覚えが悪いんだよ、俺は」

停めていた愛車に俺は乗る。月光に照らされたのは250ccのオフロードバイク。ここに来る前は雪道を走っていたから俺はこのバイクを選んだ。ブラックメタリックのヘルメットを被り愛用のゴーグルを身に付ける。グローブはめんどいんでやめた。バイクにまたがりエンジンをかける。

「あいつは あそこだな」

夜の繁華街。それを構成する建物の合間から合間へと某アメコミヒーローよろしく糸で自在に空中を移動している。いつの間にか目を凝らさないと識別できないほどに距離をはなされた。クラッチを切りながらアクセルを吹かしエンジンを温める。

「逃がさねえぞ、絶対」

俺はフルスピードでジメジメした路地裏から華やかな夜の繁華街へ飛び出した。

目的の場所へ着くとまさに廃墟と言ふべき廃屋。それと関係者以外立ち入り禁止と書かれた看板が出迎えた。

どこか薄気味悪い雰囲気。怜はそれを肌で感じながら、閉められた可動式の門を難なく飛び越えた。音もなく地面に降り立つと袋の中から愛用の得物を抜き去った。

怜がこんな場所に來たのはもちろん理由がある。本部のサーチシステムがこの工場でヴァリアントの反応を捉えられたのだ。時刻はとうに日を跨いだ深夜三時。目が冴えてひとりトレーニングルームに残っていた怜に運悪く召集がかかったというわけ。

” 捕捉した反応はひとつ。ひょっとすると取り逃がしたヴァリア



ントかもしれない” 所長の言葉が脳裏によぎる。怜はすぐに無駄な雑念を振り払うと神経を集中させた。

まずは敷地内に進入。安全な進入経路を確認した。手元の『VS』と刻まれた携帯端末には工場跡地の大まかな間取り図が転送されている。それを参考に壁伝いに工場をたどる。すると入り口らしきシャッターを見つけた。

所々が錆び付いたシャッター。使われない現在は固く閉じられている。怜はそつとシャッターに耳を当てて中の様子を窺った。ヴァリアント特有のザラリとした嫌な気配は感じない。いるのは間違いないのだが。しばらく出方を決めあぐねていると、

「助けて！」

突如、敷地内につんざくような悲鳴が轟いた。

怜は反射的に耳を研ぎ澄ませる。それに合わせて瞳に青い宝玉を思わせるブルーの輝きが宿った。これはウォリアーの力をフルに活かせる状態だ。極限まで磨かれた五感が凄まじい情報を集めていく。その中で怜は必死に悲鳴の出所を探った。

「……うぐ、くう……うう」

しかし、割れんばかりの音の洪水に邪魔された。深夜とはいえ近くには繁華街。音の洪水は耐えがたいほどの苦痛だった。それでも、「助けてッ！」

それでも怜はさっきの声を拾った！

考えるより先に右手の木刀を振り下ろす。木刀が眼前のシャッターを貫くと錆びたシャッターは薄っぺらい紙切れのようにあっさりと粉碎された。

中に入ると薄暗い不気味な工場跡地が怜を出迎える。怜は携帯端末を取り出し、見取り図と実際の内部を見比べた。それで悲鳴の主

がいる大まかな位置を特定。残された廃材を蹴りながら怜は疾駆した。木片を飛び越え、扉を破り一目散に。怜はすべての障害物を無視した。

「ここか」

怜の神速と謳われる足が朽ちた重厚な扉に足止めされる。とはいえ本気になったウォリアーには足止めですら機能しない。怜は懇親の力をこめて朽ちた扉に蹴りを入れた。

いとも容易く蹴破られる扉。と同時に生臭い悪臭と大量のほこりが怜を襲う。怜はとつさに手で顔面を守った。

そしてほこりが収まると目の前に広がったもの。

「悪趣味な。蜘蛛の巣か」

視界をまんべんなく埋め尽くす白い蜘蛛の巣。だが、それを蜘蛛の巣と形容していいものか。所々白骨化した人間の骨が絡まり、張り巡らされた巣のいたる所で小さな蜘蛛が蠢いている。怜ならずとも少なからず生理的嫌悪を覚える光景だ。吐き気がするような血生臭い刺激臭が鼻をつく。こんな有様ではとても声の主が視認できない。でも、ここにいるはずなのだ。

数え切れないほどの赤い瞳に睨まれる怜。子蜘蛛とはいえヴァリアントの系譜だ。テリトリーを侵した者には容赦ない敵意を向ける。この邪魔な兵隊アリを潰さないと人探しどころじゃない。怜は木刀の切っ先を子蜘蛛たちに突きつけた。

子蜘蛛たちがいつせいに構える。刺すような殺気だ。その殺気をそれ以上の『剣気』で怜は見返す。視線だけで萎縮した子蜘蛛たち、危険を察知したのかいつせいに襲いかかってきた。

「ハッ！」

だが、子蜘蛛たちの第一陣は怜が木刀を斜めに振り上げることで瞬時に滅された。斬られた子蜘蛛たちは赤い光になって消滅する。あくまで偽りの存在ということだ。

次いで残りの二匹をまとめて怜は斬り捨てる。

気圧されたように子蜘蛛たちはフリーズした。理屈でなく本能で実力差を感じ取ったのだ。しかし、子蜘蛛たちもただの子蜘蛛たちではない。ある程度の知能と野生の狡猾さを有していた彼らは搦め手を使うことを総意で決める。

最初は屋根から糸で宙吊りになった子蜘蛛が糸を放った。次に怜の間近で柱や壁にはり付いた子蜘蛛が糸を放った。そうして紡がれた糸は何重にも束ねられ白い繭のような檻に変貌する。真っ白な檻に拘束される怜。

『ふん、俺のテリトリーが侵されたから誰かと思えば、とんだ大物が釣れたな』

いつからそこにいたのか。紫色の毒々しい体色をした蜘蛛の異形がそこには居た。

『にしてもこいつらに手を出すのはやめたほうがよかった。奴らは俺の力の結晶だ。集団戦では無敵だよ』

怜に聞こえてるのかいないのか。独り言のようにヴァリアントは語り出す。まるで勝利を確信したように。蜘蛛の異形は掌から鉤爪の付いたワイヤーを撃ち出そうと、

「格好悪いぜ。仮にも女に袋叩きは」

閉ざされた空間に響き渡る謎の声。次いで空気を裂くような銃声が轟いた。

白繭の斜め上を凄まじい速さで真紅の光がすり抜けていく。その閃光はものの見事に蜘蛛のヴァリアントを貫いた。

『……なんで……おまえがここに』

蜘蛛の異形が驚愕の表情を浮かべながら相手に問う。それに現れた影は飄々とした口調で答えた。

「おまえを尾けたんだよ。バイクで必死にな」

『バカな。尾行は途中で撒いて』

言い終える前にヴァリアントの胴体から紅い閃光が炸裂。現れた男は銃口から噴煙を上げる黒い二丁拳銃を下ろした。

『うあ、ちくしょう』

直後に蜘蛛の異形は胴体から派手に爆発を起こした。

続いて赤い星屑のような光となって蜘蛛のヴァリアントは虚空に四散。主を失った子蜘蛛たちも同じように赤い粒子となって次々と散っていった。

「たく。余計な手間かけさせやがって」

現れた影はまたいでいたバイクからさつと地面に降り立つ。

「助けてくれと頼んだ覚えはない」

白繭の中からかけられた言葉。さらに白繭に一筋の切れ目が入った。その切れ目は徐々に広がり、最後には繭自体が崩壊する。繭の合間から蒼い木刀を薙いだ怜がいた。

「おまえってマジ可愛くねえのな」

乾いた笑いで怜の前に立つ茶髪の少年、その眼を染めるのは血のように真っ赤な真紅だ。

「出・来・れ・ば・会いたくなかったが、また会ったな」

漆黒に塗装された二丁拳銃で肩をポンポン叩き苦笑する少年。

「なんで助けた」

「はん、誰が好き好んでおまえを助けるか。なりゆきだよ、なりゆき」

「その子は？」

茶髪の少年、レイがあごで示したのは腕に抱くひとりの少女だった。

「匂いを探ってたらずこに埋もれてた。さっきこの子の悲鳴が聞こえたからな。おかげであいつに撒かれずに済んだんだよ」

そして、レイは小さく。けれど不遜極まりない笑みを口元に浮かべるのだった。

## 第六話 紅VS蒼

いきなりだけど平行線の話をしていい。決して交わらない平行線の話。知ってるか。

これって漫画とかで敵同士ライバル同士の比喻に使われてたもんだった気がする。

たとえば俺たちの人生には例外なく運命のレールが敷かれてる。その上で各々の人生を歩んでる。そんで、ふと横を見ると決して相容れない敵とかライバルがいる。お互いの進む道はどことなく似てるけど、お互いが平行で決して交わらないんだよ、なんてくだらない話だ。

で。そんなくだらない話をしたのは他でもない。神様、俺ってなんかあんたに嫌われるようなことでもしたか？ 交わらないだろ、俺とこいつは絶対に交わらないだろ、はつきりいつて水と油だ。なのに一日、正確には日を跨いだけど、運命的というか死神にでも魅入られたというか。あの女と二度目の鉢合わせとはどういう了見だ。……まあ、なんだか嫌々な予感ではしてたんだけどな。

「なあ、このガキ、どうする」

俺は襟首を掴んで死神女のまん前に助けたガキを突き出す。こういう子供の世話をするのは得意じゃないし、別に俺の仕事じゃない。「すぐに応援が来て病院に運ぶ。それだけ」

「あっそ」

素っ気ないこいつに俺も素っ気ない返事をかえす。いや、正直いうとこいつを警戒していた。

「てことはさ。お前の仕事もこれで終わりって事だよな。なら俺も帰るわ、じゃあな」

俺はとつとこの場から逃げることにする。いつまでもこの女と対峙する気はない。獰猛な野生の熊から逃げるようにじりじりと後ずさる俺。

しかし、

「どこに行く？」

という凍えるような凜とした一声にビキリと固まる。なぜ動かないのか。答えはガクガク震える両足が物語ってるような気がする。

「やっぱり、ダメか？」

小首をかしげて精一杯媚びるように言うが。冷たい視線にさらされるだけだった。

「でもな、この場には子供もいるし、派手に暴れるのはやめた方があり？」

「もう外に待機していた部隊が運んだ。近隣の住民も避難している。もうここにはわたしと、おまえだけだ」

「いうかいつ運んだんだ！　なんてツッコミも野暮らしかった。

「そりやまた。ずいぶんと戦闘におあつらえ向きな舞台だな」

「これで心置きなく戦える」

場に強烈なプレッシャーがよみがえる。この刺すような威圧感。やっぱり蜘蛛野郎なんかの比じゃない。この闘気は鋭い剣を連想させる。

「嫌な予感はしたんだよ、くそ」

俺は応じるようにシュヴァルツを構えた。もう使える弾丸はそんなに多くない。せめて体力が回復するまで待ちたいんだが。無理だろうな。

「始めるぞ」

簡潔に合図した怜はその手に持った木刀で斬りかかってくる。その剣筋に一切の迷いはない。

俺は動体視力だけで最初の斬撃をさける。無言で銃口を向けた。放たれる真紅の弾丸。怜に高速で向かうが、それを見事な剣捌きで怜は打ち落とした。

俺はなるべく距離を取った遠距離スタイル。怜は接近戦に持ち込む近距離スタイル。当たり前前の銃と剣の違いがモロに出た形だ。

しかも。俺はこの戦いの不利を悟っていた。なぜならこの女と戦って。さらに蜘蛛野郎を倒したんだ。体力と『血』の消耗は激しい。無駄弾を使う余裕はなさそうだ。

だからなるべく短期決戦に持ち込みたいが、あの驚異的な瞬発力でこっちの方が翻弄されてる。じれったいが、焦ると負けだ。落ちて着いて木刀の間合いを見極める。

ここぞと思ったところで俺のシュヴァルツが火を噴き、あいつの木刀が颯爽と迎え撃つ。

ゆっくりと流れる時間。俺の赤い弾丸と奴の青い木刀がぶつかり合うのがスローで見えて、

次の瞬間。

紅の光と蒼の光。拮抗する両者のエネルギーは一瞬だけ反発。交わった両者は凄まじい力を内包した球に無理やり圧縮され、いきなり爆発した。

つんざくような轟音と共に爆炎が寂れた工場の屋根があっけなく吹き飛ばされる。直前に赤と青の交じり合ったような閃光が見て取れたが。まさか爆発とは！

もうもうと立ち込める黒煙が、この小高い丘のような場所からもよく見て取れた。

静寂に包まれただけの住宅街に次々と明かりが灯される。なんだなんだと戸惑う人間が目に見えるようだ。想像したそんな滑稽な光景がおかしくってしょうがない。

そんな風に考える男。上から下まで黒い衣服に身を包んで、異様な雰囲気醸し出している。そして、サングラスから覗くのは血の

ような緋色の瞳だった。

「レイ。生きてるかな。ま、生きてるか。あれでなかなかしぶといもんな。くくく」

その言葉が真に何を意味するのか。ましてやどっちのレイを差しているのかはわからない。

愉快そうに笑う黒衣の男。ひとつだけわかるのは彼がヴァリアントであるという厳然たる事実だけだ。

ZERO本部司令室、爆発はすぐさまZEROの責任者、諒子に伝えられた。

「現場付近はただちに封鎖。情報操作も各省庁と連携しリアルタイムで行なえ。被害状況は窓ガラスと市民の安眠妨害だけで済ませろよ、いいな！」

諒子の迅速で的確な命令を受けて職員は方々に散っていく。諒子とはともすれば欠伸が漏れそうな自分を叱咤し、目の前のパソコンを食い入るように見つめた。モニターにはヴァリアントとウォリアーを示す青い点と赤い点が表示されている。どちらかの反応が消えた時。それが決着の合図なのだ。

「死ぬなよ、怜」

その呟きは瞬く間に慌しい喧騒の中へ消えていった。



## 第七話 予想外の結末

対峙するあの女と俺の狭間で『紅い閃光』と『蒼い軌跡』が交錯した。

俺が放った真紅の弾丸。迎え撃つアイツの蒼い木刀。その二つが拮抗し、性質が違うふたつのエネルギーが激しく反発しあった。

交わった大きく異なる力同士。それが徐々に凄まじい力を秘めた球状に圧縮されていく。俺とアイツがどうなるか見守っていると、

圧縮したエネルギーがいきなり弾けるように爆発した。

俺にとってもあいつにとってもまさに予想外の爆発。俺は腕をクロスさせて咄嗟に顔を爆発の炎から守る。自分の腕から肉がこげるような嫌な音がした。

爆炎が辺りを包み込む。廃工場の屋根を巨大な炎柱が突き抜けた。

時間が経つにつれて爆発の炎がみるみる収束していく。

俺は起き上がり全身を見下ろした。

「服が丸焦げだし」

むき出しの肌は軽い火傷を負い、服は全身にかけて真っ黒な灰になっている。無意識にヴァリアントの力も働いたらしい。見た目は派手だが、直接的なダメージは最小限に抑えられた。

しかし、よくよく考えると俺が無傷だということはあの女も無傷に近いはずだ。俺は黒煙が立ち込めた中を歩き回って探る。アイツの気配は感じない。

パキリと小さく小気味いい音が鳴る。俺は何気なく地面に落ちていた燃えカスを踏んでいた。

そこで、まるでその音を頼りにするように黒煙を裂いて木刀の切っ先が現れた。

「なっ!?!」

次いで二の腕に鋭い痛みが走る。予想外の攻撃にこっちの反応が遅れてしまった。完全な騙まし討ちだ。

幸か不幸か傷は浅い感じだが。でも、腕からの出血が酷い。

「暗殺者<sup>アサシン</sup>かよ、おまえ」

答える声はない。いや、答えは四方から襲いかかる斬撃だ。視界も悪い中、自分の山勘を信じて必死に斬撃を避ける。だが、結果は全身傷だらけ。俺はたまらず横に跳んだ。

「ちくしょう」

せめて蒼い軌跡を見ようと黒煙に目を凝らした。でも、俺は絶句した。さっきまで閃いていた木刀の青い軌跡。それが忽然と消えていたからだ。

俺は冷静になろうとして、逆に冷静さを欠いてしまう。最悪の悪循環だ。そんな動揺を見透かしたようにいきなり振り下ろされる木刀。俺は反射的に片方の銃身で受け止めた。そして、片方の銃口をでたらめに撃った。火花が散って辺りを瞬間的に照らす。ようやく相手が見えた。

「なるほど」

木刀に青い光は纏っていなかった。つまりは単なる木刀。切れ味は格段に落ちるけど。今の視界が悪い状況じゃ有効な手だ。

気配を消しながらの斬撃、纏わせたウオリアーの『力』をわざと消す判断力。それは力の消費を抑えることにも成功してるはず。

首筋に冷たい感触が走り抜けた。まるで死神に鎌をかざされたような錯覚。錯覚だけでもうすぐしたら現実になっちまう。こうなったら。

俺は状況で大雑把に見て、あえて左手に持ったシュヴァルツの片割れを捨てた。残る得物は右手の一丁だけ。銃身に真紅の輝きが一

気に流れ込んでいく。

土ぼこりが晴れ、黒煙も消えたのか。視界が徐々に回復していった。

廃工場はひどい有様だった。土は黒ずみ、壁には風穴が開いている。そこからは小さな光が漏れてる。いつの間にか朝焼けが見れるような時間らしいが、問題はそこじゃなかった。

アイツの姿がどこにも見当たらない。俺のヴァリアントが持つ本能がけたたましく警鐘を鳴らした。

反射的にその場から離れる。直後、地面をえぐる斬撃。見ると間近に木刀の切っ先が見えた。もう少しであの木刀は俺の血を吸っていたはず。再び木刀が消え、あいつの気配を見失う。

だんだんトリックが見えてきた。

俺は隙について耳を澄ませた。聞こえてきたのは微かな物音、これは人が跳んだ音だ。考えろ、あいつが跳ぶ理由を……

ふと上が気になった。ひょっとして。

「そういうことか。おいネタはバレたぜ」

俺は真上を、吹き抜けになった天井を見上げた。正確にはそこに張り巡らされた真つ白な蜘蛛の巣に。あの爆発でも燃え残る頑丈な糸だ。人を支えるくらいの強度があっても不思議じゃない。

俺は天井に向けて何度か撃った。当たった感触はないが、って、背中に冷やりとした寒気！

振り向きざまに木刀が迫ってきた。背中から左肘にかけて袈裟懸けに斬られる。派手に血飛沫が舞い散った。

怯んだ隙に積みかけるように間合いがゼロへ。一気に接近戦へと持ち込まれる。俺に不利な間合いだ。

「くそ」

苛烈な斬撃で俺はとうとう片ひざをつけてしまう。それは負け、死を受け入れたのと同じかもしれない。そのときほんの少し。ほん

の少しだけ自分の負けず嫌いに火が点いた。

「俺の悪い癖だな」

立ち上がり俺の中にあるヴァリアントの力をすべて搾り取る。バチバチと放電のような赤い稲妻が迸った。これでシュヴァルツの銃身にすべてのエネルギーが充填された。

この一発にすべてが懸かっている。俺は全神経を張り詰めさせて自分のポジションを把握した。

相手の斬撃を避けつつじりじりと後退していく。相手を自分の有利な場所へと誘導する為に。

一見して最後の悪あがき。そう見られたらこっちの勝ちだ。

あいつは躊躇うことなく一直線に斬りかかってくる。俺は迫ってきた木刀を真正面に跳んでかわした。さらに後ろに跳んで体勢を立て直す。それを追う相手の追撃。すぐさま振り向き、木刀を銃身でガード！

「どうでい！」

「無駄だ」

胸の傷口に容赦ない蹴りが浴びせられた。俺は思いっきり吹っ飛ばされる。

今だ！

俺は左手で『それ』を力強く掴んだ。大げさにゴロゴロと地面を転がる俺。そのせいで埃が舞う。よし、拾ったのは見えなかったはず。

「これで終わりだ」

あいつは倒れた俺を見下ろした。言い残す言葉は。なんて無意味に喋る馬鹿じゃない。間髪いれずにとどめの一撃が無慈悲に振り下ろされる。

だけど最後の最後でアイツは油断した。この一撃は単調でしかも太刀筋が読みやすかった。

「悪いな。これが俺の得意技だよ」

木刀を再び右手の銃で、懇親の力を籠めて受け止めた。

「それがどうしたッ！」

木刀に更なる力が加えられる。木刀に接触した銃身が赤と青の火花を散らした。じりじりと近づいてくる木刀。

「いや、俺の勝ちだ」

最後の切り札。隠し持った”左手”をあいつに押し付ける。正確には牙を持った鋼の銃口を、だ。

「これでチャックメイトだ」

あとはこのトリガーを引くだけ。ほんのちょっとだけ力を籠めれば、それでいい。なのに、どうしてこんなに眠いんだよ。

自分の身体を見下ろすと真紅の鮮血が黒焦げの服を朱色に染めていた。

眠い。血を流しすぎたし、『力』を限界まで使い過ぎた。押し付けた銃口がゆっくりと地面に落ちるのを呆然と見つめ……

冷たい剣が首筋に当てられる。冷やりとした感触。その感触もだんだん感じられなくなった。

「それが最期の一手」

あいつは俺をただただ冷静に、冷酷に見下しながら問いかけた。

「決まって……んだろ、ボケ」

荒い息を吐き、ぼんやりとした意識で呟くように答える。

負けた。悔しいことに。ここまでやって俺は負けちゃった。

まあ、さすがに二度も連任せな戦いだとな。ちくしょう。

「……この化け物女。おまえも連戦のくせに、なんで『力』維持してんだ」

負け惜しみに実はさっきから抱いてた疑問をぶつけてみた。

「水は、絶えず補給してるから」

そう言っただけは腰のペットボトルを指さした。そうだった。ヴァリアントとは根本的に力の性質が違うんだ。

「それでも……体力は本物だろ。くそ、俺を煮るなり焼くなり、好きにしゃがれ」

「喋ると傷に障るぞ」

自分で付けたくせに。

「余計な……お世話……」

やばい。マジで視界が霞んできやがった。

眠い。すんごくねむい。むしろ永眠しそうな勢いだ。寝ちゃダメだ。寝ると死んじゃう。

最期に見たのは、

冷酷に命を刈り取るうとする青い木刀。

「で？」

誰に問いかけるでもなく俺はつぶやいた。

「なんで俺は生きてんだ？」

正確には出血多量で貧血気味で倒れててこのままだと血液不足でショック死しそうだけど生きてるには違いない。

あの後、ここで何が起きたのか。あの女が情けをかけるはずがない。なのはどうして。

様々な疑問が大いに残る。けど、今は身体中の神経細胞が休息を求めている。思い出したように暴力的な睡魔が襲いかかる。まぶたを閉じながら俺の意識は夢の世界にあっさりと飛ばされた。

こうして俺の短くも長い一日は、あまりに予想外な結末であっさりと幕を閉じたのだった。

## 第八話 意外と家庭的？

夜空に羽ばたく黒い影。暗闇に溶け込む赤い瞳。ここ最近、この町ではそんな噂が絶えない。

仕事帰りに上司の悪口をしこたま吐いた彼女は軽い酔いのまどろみにいた。

おぼつかない足取りで駅前の並木道をゆっくりと歩く。タクシーを呼ぼうと思ったが家は駅から近所だしと思い直した。人気がない帰り道。彼女はまだ気づかない。

それは彼女の背後をゆっくりと、確実に追尾している。それは冷静だった。人気がある場所ではことに及ぶつもりなどない。

『そろそろ、だ』

それは完全に人気がなくなったのを確認すると。漆黒の翼をはためかせて徐々に彼女へと接近する。慎重に慎重を重ねて。

彼女は異様な気配に気づき、後ろを振り返った。”すぐさま彼女へ襲いかかる。悲鳴を上げられる前に口元を押さえ、首筋へその鋭い牙を刺し込んだ。

極上の獲物を心ゆくまでじっくりと味わい尽くす。それは体中に力がみなぎるのを感じた。

ゆっくりと彼女を離れた。

崩れ落ちる女。その顔は血色が悪く、正常な人間ではありえないほど紫色に変化している。

口元を擦りそれは自らの住处、夜空へ飛んだ。この街で異常に気づく者はまだ誰ひとりとしていない。まるで夜の静けさを壊さないよう気遣った、鮮やかな犯行だった。

空からは、薄ぼんやりとした月光が覗いていた。

「うぐ!?!」

現在、時刻はちょうど八時三十分。あの戦いよりすでに二日後の土曜日だ。

怜はわき腹や肩あたりに耐えがたいほどの痛みを覚えていた。その銃創に近い怪我の上には丁寧に包帯が巻かれている。普通なら完治まで何ヶ月もかかる怪我だと医者に呆れられてしまった。医者や所長の前では痩せ我慢したもの、やはりとんでもない重症だったらしい。何度も握っていた木刀を落としてしまう。

怜は三十分すこし前から日課の素振りを繰り返していた。

彼女は何気なく日々の日課を繰り返そうとしたただけなのだが。いや、本当はわかっていた。こんな怪我で素振りは無謀だと。それでもやりたくなるから不思議だ。慣れ親しんだ習慣とは怖い。

”決して焦らず自分のペースでやれ”

怜は剣術の師匠の教えを思い出す。このまま鍛錬してもペースは乱されるばかりだろう。タオルで汗をふき取りながらトレーニングルームを出る。

今日は土曜日だ。運がよければゆっくり休めるだろう。あの鬼、もとい所長が容赦ないシフトを組まなければの話だが。一抹の不安感がぬぐえないのはなぜだろう。

ZERO本部の五階にトレーニングルームはあった。ロッカーで私服に着替えた怜は広い廊下を通りエレベータの前に立つ。

チンという音がしてエレベーターの分厚い扉が開いた。怜はやってきたエレベーターに入ると一階のボタンと開閉のボタンを押す。分厚い扉はガタンと閉まった。

特有の浮遊感を感じながら、エレベーターは真っ直ぐ下の階へと突き進む。再びチンという音と共に扉が開いた。



「よう！」

開いたと同時にスチャツと手を上げた。所長が。

彼女はその足で近くのマンションへと向かう。見えた影は気のせいということにした。

「つれないな、怜」

「そうですか」

「ああ、冷たいっていうか」

オフの日の彼女に出会うつろくなことがない。新入りのウォリアー以外なら当たり前の常識だ。

数分もしない内に目的のガーデンマンションが見えてきた。横目でみると所長が消えている。まあ、いずれ神出鬼没に現れるだろう。リハビリに自室まで階段で行こうかと思ったが、やはり無理はよくないとやめておいた。

エレベーターで自室のある階に戻ると自室の前にたどり着く。ポケットからキャラクターのキーホルダーが付いた鍵を取り出すと鍵穴に刺し込んだ。

部屋の中に入る怜。中は普通な部屋で、一人で住むには結構広い部屋だった。

部屋には必要最低限の生活用品だけがあり小さな本棚には埃をかぶった本がいくつか入っている。怜は制服に着替え朝食を作り始めた。メニューはオーソドックスに和食だ。

しばらくすると良い匂いが部屋に香り出す。鼻歌交じりに味噌汁の味見をしていると、ありふれたチャイムの音が室内に響いた。

「はい」

怜はいったん料理をやめると来客を迎えるために玄関へと向かう。チェーンロックを外して扉を開けると、

「よう」

軽く手を振って微笑む女、やはりというか諒子だった。たしかに諒子が住むのはZERO本部で、ここは徒歩で数分の場所だ。しか

し、だからといってパジャマはないだろうパジャマは。

「諒子、さん？」

怜は諒子を名前で呼ぶ。諒子はプライベートで所長と呼ばれるのを嫌うからだ。本人曰くオンオフは切り替えるタイプだかららしい。

「入っていいか？」

「……どうぞ」

どうせ断つても入るだろうが一応そう言っておく怜。

「どうしました？」

そういう怜だがどうせ用件は飯をたかりにきたか仕事の用件くらいだと思っていた。ちなみに飯をたかるのは諒子が料理をしないのと、怜の料理が美味いかららしい。

「おまえ、なんか失礼なこと考えてるだろう」

「知りませんけど？」

「ふう、まあいいよ、ホイこれ」

怜は諒子から謎の用紙を渡される。この感じではどうやら後者らしい。

「新しいヴァリアント、ですか？」

「ああ、ご明察だよ」

怜は机に謎の用紙を広げる。見ればこの街で多発する変死事件のデータだった。

「まあ、こういうわけさ」

「重要な部分を端折りすぎです。なにがこういうわけですか」

「あ、悪い悪い」

寝ぼけているのか？ この上司に自身の命運を託しているのは誤った選択では？

そう思うが仕事では敏腕を振るうのだ。私生活のだらしなさに目をつぶれば出来た上司に違いない。

「この変死事件。巷じゃ現代の吸血鬼って言われてるが。目撃証言やその他諸々からヴァリアントだと断定した」

「それでわたしに担当しろと」

「ん、おまえは怪我人だろ、耳に入れたほうがいいと思っただけさ。担当は別のウォリアーがやる」

「は？」

そんな報告をするために。わざわざこの部屋に来るはずがない。ということとは、その行動の裏に何かしら魂胆があるということ。

「報告はついでだ。おまえに朝飯をたかりに。お！ 今日美味そうだな」

「はあ。やっぱりそうですか」

涎たらしめて欲しそうにこちらを見る上司。頼むからこれ以上の醜態を晒さないで欲しい。

「……食べます？」

「おう、いつもいつも悪いねえ」

確信犯のくせに。そうは思ったが、なんだかんだで作った料理を誰かが食べてくれると嬉しいものだ。冷蔵庫からもうひとり分の食材を取り出す。

しばらくして立派な朝食が出来上がると。

「それでは。いったきまゝす！！」

「はいどうぞ」

諒子はテーブルにつくと箸を持って朝食にがつつく。

途中で「ここ最近、コンビニ食だったから」とか「お前、良い嫁さんになるぞ」とか「私も婿さん欲しいとか」最後は愚痴りつつ……

怜は何となくだがこめかみを押さえた。この頭痛は怪我によるものではないだろう。

「ふう、ご馳走さま。美味しかったよ」

「どうも」

諒子は腹をポンポン叩いて楊枝で 怜はそこで話題を変えた。

「ところであのヴァリアント。その後の足取りは……」

あのヴァリアントとはあの『大神レイ』のことだった。あれだけの惨事となると上司への報告義務は怠れない。余談だがあの爆発の収拾に所長はだいぶ骨を折られたらしい。怜本人も報告を怠ったこ

とを言及され、危うく上層部の査問会にかけられる手前までいった。  
「ああ、あの日以来まだ動きを見せない。今ごろ虎視眈々と爪を研いでる真つ最中だろうなあ。ここは再び表に出るまで待つしかない」  
「なりは少年ですけど、油断は禁物です」

「わかつてるさ。おまえをギリギリまで追い詰めたヴァリアントだ。上層部が承認すればめでたく上位警戒リストに載るヴァリアントになるな」

「そうですか」

「ま、とりあえずいまは怪我を治すことに専念した方がいい。お大事にな」

「どうも」

「それじゃあな」

諒子は怜に別れを告げると上機嫌で帰っていった。パジャマ姿なのはこの際無視する。

「ふう。疲れた」

まるで嵐のような人だ。怜は溜息をひとつついて机の食器を片付け始めた。

## 第九話 宿無し i n オレ！！

あの死闘から三日後……

公園の脇にある水場で顔を思いっきり洗った。こうすると気分がスッキリする。けど、今日は気が晴れそうになかった。なんせ宿無し生活、今日でめでたく三日目に突入したんだから。

「あゝ、寒い」

ダンボールと新聞紙で夜風をしのぐのもそろそろ限界だ。飯もしばらく食べてないし、全身の傷もかなり痛む。

正直、俺の体は満身創痍だった。いくら自然治癒力が高くてもモノには限度つてもんがあるらしい。二の腕の傷は治ったけど、袈裟懸けに斬られた所は未だにヒリヒリしやがる。

まあ、この状況を打破する奥の手もあるにはある。しかし、それに頼るのは男のプライドが許さねえっていうか甘えて迷惑かけたくないっていうか。そんな葛藤が邪魔してたが、そろそろマジで限界だ。何時どこでヴァリアントの飢餓がぶり返すかも分からない。もうくだらないプライドは捨てるべきだな。

携帯は持っていないから近くにあった公衆電話を使うことにした。

相手の番号を押してしばらく待つと、

「もしもし。大神ですけど」

無愛想な親父の声が受話器から聞こえた。

「あ、もしもし。俺だよ俺」

「あー、家にはオレオレ詐欺に引っかけりそうな財産は無いんですがね」

「今時、んなことするか！ 俺だ、レイだよ」

「ほう、レイだと。ある日いきなり行方不明になって以後一切の音沙汰がない万年親不孝者がいまさら俺になんのようだ」

グッ！ 痛いところを。

「あ、あのさ、今からそっちに行きたいんだけど。それは大丈夫かって電話。これから大丈夫かな？」

「唐突な電話に、唐突に会いたいか。まあいい。来るならさっさとしろよ。俺もおまえとたつぷり話したいからな」

「そりゃ楽しみだな、オイ」

「ああ、楽しみにしとけ」

一時間後に相手の男、オッサンと会う約束を取り付け、俺は電話の受話器を置いた。

「ったく。相変わらずな奴」

昔とまったく変わっちゃいない。まあ、それが良いところといえば良いところだけど。

公衆電話を出ると俺は停めていた愛車のバイクに乗り込んだ。

時間はすでに夜の九時半をまわっていた。慣れない道のせいで約束の時間を大幅に過ぎている。致命的なタイムロスだ。

ヤバイな。オッサンの奴、絶対怒ってるぞ。あの凄味のある悪党面を思い出すとめっちゃ不安だ。俺はアクセルを回しスピードを上げていった。

鮮やかに通り過ぎていく景色。月明かりに照らされた街並みに人影は見当たらない。対向車線で何度か自動車や単車とすれ違っぐらい。辺りは雲から覗く月光を浴び薄ぼんやりとしていた。

「ん？」

突如、俺の耳が鳥にしてはやけに大きな羽音を捉えた。それもかなり近距離で。俺はとっさに夜空を見上げた。

月明かりに覆いかぶさる巨影。一陣の疾風を巻き起こし、俺の上を通り過ぎた。そして、俺が走っていた方向に飛び去ると急激にこっち側へ旋回して、

って、こっちに突っ込んできやがった。

「嘘だろッ!？」

バイクを地面に擦らせながら無理やり相手の突進をかわす。派手に散る火花。だが、無理した反動でバイクごと地面に投げ出された。何とか受け身は取れた。ゴーグルと共にメットを外すと無造作に放り投げる。その眼前に刺々しいシルエットの影が静かに降り立った。

『探したぞ。貴様が噂の男か』

雲が移動し顔を覗かせた月からの淡い光がその異常な姿を暴いた。

茶褐色に染まった体。バイザーのような部位から覗く真紅の眼。腕から生えた漆黒の両翼。頭部から覗く長い獣の耳、それは神経質そうにピクピクと動き、鋭い牙には赤い鮮血がこびり付いてる。

その姿は例えたら人型に化したコウモリ。十中八九どこからどう見ても俺と同じヴァリアントだ。

「つくづくおまえらと縁があるよな、俺って」

独り言のように化け物へ問いかけ、腰に巻いた愛用のホルスターから二丁のトリガーを握った。相手の殺気が強まる。

急に辺りが静かになる。どうもさっきまでやかましかった虫が鳴き止んだらしい。野生は危険を察知する能力に優れてるみたいだ。

街灯に照らされるだけの周りに家も無い簡素な道路。そこで俺た

ちは対峙した。

『死ね！』

相手が手に備えた先鋭<sup>せんえい</sup>な爪で先に襲いかかってきた。一秒前まで俺がいた場所を爪が通り過ぎていく。バックステップで爪を避けた俺はお返しに銀色のトリガーを引き絞り、敵の腹に向けて三回撃った。

赤い閃光が弾けて、あいつの体が三メートルぐらい吹っ飛ばされる。行き着いた先はどっかの家の駐車場だった。奴は停めてあった車に当たり車のボンネットを派手に凹ませる。それでも動く元気はあるのかアイツは冷えたコンクリートに無様に転がった。さすがにタフだな。

「さてと」

俺は道路に投げ出されたバイクを拾い起こすとシートにまたがりエンジンをかけた。何度かアクセルを吹かす。そして、いきなり発進させた。

バイクを使った人間相手には危険極まりないタックル。でも、奴はムササビのような腕を広げるとそのままバイクを両手で受け止めた。

『人間如きの乗り物が、我々に対して武器になるものか』

「無理やりにも武器にしてやる！！」

俺は左手にハンドルを任せると、右手でホルスターからシュヴァルツの内の一丁を抜いた。

銃口を奴の顔面にピタリと押し付ける。これにはさすがの奴も焦った。

『よ、よせ！』

「断る」

遠慮なくシュヴァルツの弾丸を零距离射撃でぶっ放した。閑静な住宅街に場違いな銃声が轟く。

「ッ！？」



真紅のエネルギーが奴の顔で弾け、顔が重い衝撃に揺れる。飛び散った紅い閃光は近すぎて俺の顔も傷つけた。傷が確かな痛みと熱を伝えてくる。

「ヴァリアントの治癒力で考えたらまだ傷は浅い方だろ」

『き、貴様……』

奴は懲りずに鋭い爪で俺の顔面を狙おうとする。俺はシュヴァルツをホルスターに入れ、バイクの前輪でこいつの顔面を力チ上げた。

鈍い音と共に相手は道路に崩れ落ちる。バイクから降りると銃口を突きつけたまま奴に近づいた。

「答える。どうして俺を狙った」

「……」

「答えないなら、ん？」

足に絡みつく指の感触。突然の浮遊感。気がついたら高空から地面に落ちていた。

「痛い、にやろう！」

野郎の馬鹿力で体ごと放り投げられたみたいだ。身体中が痛みで軋む。そういえば俺は怪我人だった。オマケに凶悪な倦怠感が襲いかかる。見るとあの女に付けられた傷口が開いて出血していた。

『貴様、覚えてろヨ』

そう言い残してあの野郎は月が輝く夜空に飛び去ってしまった。

「野郎、何が目的だったんだよ」

最初から俺を狙ってたのか。それとも……

……

……

「……あ~~~~~!!」

慌てて腕時計を見たらすでに夜の十時を過ぎていた。血とは別に妙な冷や汗が吹き出る。

これは本格的にヤバイ。これじゃオッサンとの約束を破ったも同然だ。

俺は慌てて道路に放置した愛車に駆け寄る。自分の怪我のことは完全に吹っ飛んでいた。

スタンドを戻して乗り込みエンジンをかけると俺は目的の場所まで思いっきりバイクを走らせた。

## 第十話 再会と監視者

喫茶店『mina』

店に明かりは点いていたが時間が時間だけにドアにはクローズの木札がかかっている。

そんな閉店した店内にゴツイ体格を有した山男風の男がいた。

「遅いな。あいつ」

彼には待っている人間がいた。名は大神レイ。昔からの腐れ縁で、年の離れた友人のような関係だ。そのレイが急に電話をよこしたのがつい一時間前のこと。

昔から気まぐれな奴だ。だが、無闇に人を頼るような男でもない。変なところで気が回る奴だったから。どっちにしる懐かしい再会に変わらないが。

男はやれやれとため息をつきながら店の片付けに入ろうとした。

そのとき、

フオオオント、独特のエンジン音が男の鼓膜を震わした。

「やつとか。あの遅刻魔め」

男はありとあらゆる罵詈雑言を頭の中で用意した。

カランカランとドアに付いたベルの澄んだ音が鳴る。

男はすぐさま悪態を浴びせようとした。しかし、ドアから現れた茶髪の少年、レイの様子を見て度肝を抜かれた。

「……………悪いな、オッサン。野暮用で遅れちゃった」

着ている衣服は血だらけの傷だらけ。顔は青ざめ、足はおぼついていない。

「おまえ、どうしたんだ！」

「すまんオッサン……………しばらく寝かせてくれ」

まるで魂が抜け落ちるように。レイは地べたに倒れてしまった。

最初、視界に映った光景は見知らぬ天井だった。

真上にはプロペラみたいなのがクルクルと回ってる。明るい照明が目眩しかった。

「目が覚めたか。レイ」

誰か野太い声が俺の名を呼んだ。聞き覚えがある。声の主を探すと黒髪に無精ひげを生やしたオヤジが俺を見下ろしていた。

「出来れば綺麗な美人に起こしてもらいたかったな。オッサン」

「相変わらず口の減らねえ野郎だな、おまえ」

「あんたこそ相変わらず悪人ヅラだぜ」

俺はゆっくりと起き上がり、寝かされていた革張りのソファーから降りた。その所為で顔に付いた何かがベロンと剥がれる気配。絆創膏だった。

「傷の手当て」

見れば体中の傷に下手くそな巻き方で包帯がしてある。おかげで止血には成功していた。オッサンが手当てをしてくれたらしい。

「ありがとな、オッサン」

「昔のよしみだ、気にするな。それとな、レイ」

「ん？」

「俺はまだ四十二だ」

「了解、オッサン」

「はあ、もういい。そこに座れ。コーヒーでも入れてやる」

店内に敷き詰められた机と椅子。向こう側にはきちんと閉じられた紺色のカーテンがある。俺はオッサンの言うとおりにカウンターへと腰掛けた。

カウンター越しに向かい合う俺とオッサン。

オッサンは強面でごつい顔、体格も大きく盛り上がった筋肉。黒髪に無精ひげを生やしている。だけど面倒見が良くて笑うと愛嬌が

ある活かしたオヤジだ。雰囲気はどことなく『親父』に似ている。

「それでだ」

なんて言葉からオッサンは話題を切り出した。

「真っ先におまえと三年ぶりの再会を祝いたいところだが」

「分かってるよ。俺が怪我した理由だろ」

「それもあるけどな。最初におまえが失踪した理由を聞こうか」

「まあ、いろいろあって」

「答えになってない」

「聞かないでくれよ。俺もあんまり言いたくない」

よっぽど俺が言いたくなさそうな顔をしてたのか。オッサンもそれ以上は聞かなかった。

「じゃあ、怪我した理由は。それも言えないってか」

「奴らに襲われた。俺のお仲間さん」

俺の言葉のニュアンスに、オッサンの表情が変わった。

「まさか、ヴァリアントか」

「そう。うわ!？」

襟首を掴まれてオッサンの元にぐいつと引き寄せられた。オッサンのこれまで見たことがない表情。

「おまえ、さっき『俺のお仲間さん』って言ったよな」

「お、おう」

「もしかして、おまえ!」

「……………言い出そうにもきっかけが見つからなくて……………ごめん……………」

俺の謝罪にオッサンがゆっくりと手を離す。戸惑いとか怒りとかそれらがごちゃ混ぜになった顔をして。さっきの謝罪は俺がヴァリアントだと認めたのも同然だ。

「謝るな。べつにおまえが悪いわけじゃない」

「さいですか」

俺もオッサンも押し黙る、奇妙な沈黙が流れた。そのどうしようもなく気まずい雰囲気嫌ったのかオッサンが「そういえば」と口を開く。

「いまどこに住んでるんだ」

「え、そりゃもう。ダンボールハウスのホームレス生活ですよ」

「ふざけてるのか？」

「残念ながらマジだよ。すでに宿無し生活三日目に突入だ」

無計画に他県へ移動したツケがここで回ってきた。宿無しでバイトもすぐには雇ってもらえない。正直バイクのガソリン代にも困っていた。

「なんなら俺のところで居候になるか。ちょうどバイト募集してたんだが」

「え、マジで!？」

「無論タダ飯は食わさんぞ。しっかり店でこき使っからな」

「ありがとう!!」

俺は水を得た魚のようにすぐさま復活しオッサンに礼を言った。調子良すぎだろうとオッサン。すまん、空腹と寒さには勝てなかったんだ。

その後、俺はオッサンの炒れたコーヒー片手にしばらく思い出話で花を咲かせた。

コーヒーも三杯目にさしかかった頃。ふと奇妙な違和感に捕らわれた。

紺色のカーテンだ。

俺はホルスターに差し込んだ拳銃の一丁を抜いた。

「うわおッ!？」

俺の拳動にオッサンが素っ頓狂な声で驚いた。俺は口元に人差し指をかざしてオッサンに黙るようジェスチャーする。俺は銃口を向け、抜き足で静かにカーテンへと近づく。

「逃げやがった」

気配は早々にその場を去っていった。もう窓の外は深い闇に包まれている。深追いはできなかった。

「無用心だな。鍵ぐらいかけとけよ」

見るとカーテンの下窓は閉まっていなかった。無用心なオヤジだ。それを聞いてオッサンは気まずそうに頬をポリポリとかく。

「悪かったな。いや、それにしても俺は鈍ったか。あいつの気配に気づけなかった」

「いや、気づけなかったのも無理ないな。俺も”微かな違い”に気づいただけだ」

「微かな違いだあ?」

「あのカーテンだよ。最初に見た時はぴったり閉じてただけだな。さつき見たら位置が微妙に動いてた。大方さつきの奴が中を覗くために動かしただろ」

俺は変なところで鋭いらしいし。だからこそ気づけただけの話だ。

「何者なんだ」

「さあな。某国のスパイとか?」

「ただの喫茶店にスパイ送ってどうすんだよ」

「俺を監視するため、なんて。いや、まさかな」

冗談めかしながら俺も考えた。中を覗く行為にしたってやり方が不用意すぎる。様子を窺うだけなら盗聴器でも小型の盗撮カメラでも仕掛ければいい。とか言いつつ俺はそっちの方面に明るくないがまあ、さつきの奴はどこか素人っぽい印象を受けた。

「しかし、どうにも上手すぎるタイミングだよな。俺が来た途端なんて」

「まさか奴ら」

「かもな。でも奴らにしちゃお粗末なんだよな。まあ、どれも根拠ないけど」

カウンターの向こうでカチャカチャ音を鳴らすオッサン。

「もう一杯、飲むか」

俺はオッサンに白いカップに入れられたコーヒーを差し出される。受け取ったカップからは白い湯気が立ち上っていた。

「サンキュー」

礼を言いつつ俺はそのコーヒーを口に含んだ。

懐かしい味と苦味に頭が冴えてくる。

奴らが何を企んでいるのか。それを見極める為にもまず行動しないとダメだ。

「腕が鳴るぜ」

俺は不敵な笑みを浮かべ、これからの事に思いを馳せた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7349a/>

---

紅と蒼 - レイ -

2010年10月21日21時30分発行